

# 居住地域への愛着意識について

高橋 準 郎

## はじめに

筆者は、曾って、本学研究紀要（「コミュニティ・センチメントに関する一考察—地域への愛着意識を中心に—」第16号,1982）において、地域社会に対する愛着意識 (local attachment) とは如何なる概念において捉えられるか、またその概念の構成要件とは何かとする論点を中心にその考察を試みたことがある。本稿では、これらの分析結果を前提に愛着意識がとくに住民意識調査を中心に如何なる位置づけがなされてきたかの検討を通じて、再び愛着意識の概念の枠組について考察をすすめたい。

## I

いわゆる、これまでに住民意識調査を中心とする、さらにはまた都市社会学や地域社会学などにみられる愛着意識の概念の不明確さは、愛着意識そのものが情緒的、感覚的次元にかかわるものであるための、その本来的な性格に由来するものとは別に、「住民生活意識」、「自治意識」、「コミュニティ意識」などとの関連において概念的に混同して用いられてきたことにも主たる原因がみとめられる。ところで地域社会にかかわるタームとして、とくにこれらが重要な学術的意味・内容を帯びて用いられることになったのは、その背景に1960年代にはじまる高度経済政策がもたらした都市化現象によって、地域共同体が崩壊したことにもその間接的要因をみることができよう。地域共同体の崩壊・解体現象は当然の結果として、とくに政策レベルにおいて直ちにこれにかわるべく新しい地域社会の創造へとむかわせることとなった。こうした新たな地域社会形成のための具体的な要請は研究分野からながめれば、とくに都市社会学におけるコミュニティ研究として具現化されてゆく過程でもある。1960年代のこうしたコミュニティ研究を端緒にこれらのタームはそれらの研究上の重要な方向性を示す、それ独自の内容を表わすキ概念として位置づけられてゆくことになる。

さて、奥田道大氏によれば、〈コミュニティ〉のデーターの基礎は都市住民の社会意識調査を中心に固められてきたとし、都市社会学における社会意識研究の系譜を時期的な区分にもとづいて、第Ⅰ期（1950年代前半）—都会人の典型—、第Ⅱ期（1950年代後半）—都会人のパーソナリティ・社会的性格、第Ⅲ期（1960年代前半）—現代人の社会的性格—、第Ⅳ期（1960年代後半）—市民意識—とに区分している。<sup>(1)</sup>とくに愛着意識との関係でこの時期区分をながめれば、第Ⅳ期が最も密接な関係にあるものといえる。1960年代後半は、周知のように関東周辺の団地を中心とする、いわば大都市郊外地域の調査研究が積極的にすすめられた時期でもある。ここで注目されることは、いわゆる地域社会が市民意識のタームにおいて、新たな方向性をもつものとして位置づけられてくることである。いわゆる「市民意識の主題発見は60年代後半までの都市的パーソナリティ、都会人の社会的性格の系譜をひく諸研究との画期が自覚」<sup>(2)</sup>されていることである。具体的には「市民意識形成の想定は農村的の後身とのつながりを論理的に断ちきったところに起点をおいている。そのかぎりにおいて市民意識形成と地域社会的属性とは逆相関の位置にある…農村的の後身とのつながりを論理的に断ちきったところで市民意識形成と地域社会との新しい対応を想定」<sup>(3)</sup>しているものであり、なおまた「このことは〈ローカリティ〉〈地域共同体的属性〉の徹底した喪失・解体化が、生活の社会化の社会的命題に基づく「地域社会」創造の客観的可能性を、逆説的に示唆することになる」<sup>(4)</sup>のである。60年代後半での都市社会学におけるこうした市民意識と地域社会との関係は、同時にいわゆるモデルとしての「コミュニティ」論の展開によって、新たな発展的方向性をもつ概念として地域社会の分析が開始される。それは「全体像としての都市化社会の構造的変容を一定の射程としたうえで、社会意識研究の方法意識と意識主体の内実を直接的に問う場として、〈地域社会〉を仮定している。すなわち地域社会の一類型としての〈コミュニティ〉モデルを、〈地域生活過程における意識と行動の新しい体系〉として把握」<sup>(5)</sup>しようとするものである。こうした過程を経て展開される、「市民意識」、「コミュニティ意識」が包括的に共通した理念をもつものとして捉えられるのは、これらがあくまで規範的な枠組ないしは期待の枠組に準拠していると思われることである。従って、この方向でとらえられる住民意識（＝愛着意識）は、ただ単に住民がある一定の地域社会で生活し、そしてそこで住民の間に広がっている意識ばかりを指すのではなく一般的価値意識とも結びつく社会意識としての性格をもつことになる。ここで、本稿の課題である愛着意識とのかかわりからみれば、こうした市民意識、コミュニティ論の展開は愛着意識の概念規定に係っての看過し得ない重要な意味をもつことになる。このことは先の「市民意識形成と地域社会的属性（〈ローカリティ〉〈地域共同体的属性〉）とは逆相関の位置にある」との指摘にみることができる。つまりこの視点は、これまで多くの論者によっても指摘され、且つまた注目されてきた市民意識と地域社会との係りに関する論点としてもとらえ直すことができる。

周知のように、倉沢進氏はこれまでの団地調査のデーターをもとに、市民意識と地域社会と

の係りをつぎのように規定している。「われわれは、従来の調査研究が多くの場合、規範としての市民意識を題目としつつ、実際には郷土愛的地域連帯ないし、ローカル・アタッチメントを測定し、これにもとづいて、移動性の高い、定着性の低い来住市民の市民意識を低いものと断じてきたのを、誤りと考えた。そこで偏狭なローカル・アタッチメントを離れて、市民社会の市民として、どの地域に住もうと、永住の意志の有無に拘らずその地域社会を自発的共同によって向上せしめようとする態度をもって市民意識とした」。(6) この市民意識に関する規定で注目されることは、すでに明らかなように、ローカル・アタッチメントと市民意識は係りのないことを明示したものであった。なお、こうした同氏の「小金井市」における調査結果の結論は、つぎの指摘にみることができる。「(1)移動性や定着性は、市民意識と関係がないこと、(2)地域社会との結びつきの少ない、居住歴の浅い人々の方が、また新来住市民の中では一般来住者より団地居住者の方が、市民意識が高いこと、(3)団地居住者は地域集団への参加が高いこと、(4)団地居住者と一般来住者の間に市民意識の差はみられず、地域集団への参加が市民意識を高める原因とはいえない」などである。本調査と同様の結論はまた中村八郎氏によって得られていることも周知のとうりである。すなわち地域社会への係わりを「〇〇市あるいは××地区発展のために」と「住民の権利を守るために」という二つの動機づけのあることを指摘した。(8)

こうした分析結果に対して、鈴木広氏の、特定の地域社会に根ざしたローカル・アタッチメントがない人々は、地域をよりよくしようとする意識や運動を期待し得ない、との指摘やまた「市民意識をもつ住民は地域社会の向上のため実際に活動を行っているのかどうかを示していない」などの批判もみられる。奥田氏は、これとの関連で、モデルとしての「コミュニティ」(10)との係りに関して「ひとつの場あるいは場としての地域社会とは、その意味内容を異にしている。〈コミュニティ〉は、ミニマムの要件としても地域性(居住性)を含意しているタームである。そのかぎりでは〈コミュニティ〉と〈地域共同体〉とは地域性に係わる同次元尺度の、両極に位置づけられることになる。……この意味では地域共同体意識とは別次元の尺度に位置づけられるモデルであろう」(11)との見解を示している。こうした倉沢、奥田両氏の「市民意識」、「コミュニティ」論を概観するかぎりにおいても、そこには愛着意識の概念規定に直接的に係るこうした重要な視点が含意されているように思われる。そこで再び愛着意識との関係からみれば、倉沢氏が指摘するように、市民意識は権利・義務関係によって住民が自己の利益を守るため、あるいは住民が自らの共通した利益を拡大するための連帯行動をとることは当然のことであるにしても、コミュニティ内に利害の対立が起きた場合、地域への愛着、定住意志、帰属感といったものをもたない住民はこれにどのように対応するのであろうか。またモデルとしての「コミュニティ」との関係でみれば、あくまで感覚的、情緒的な次元でとらえられる愛着意識は、普遍的な価値意識をもつものとしての、いわばコミュニティ意識レベルでの類型化(〈地域共同体〉の系と〈コミュニティ〉の系の区別、さらにはモデルとしての〈コミュニティ〉に

倣ったと思われる愛着意識の「伝統的連帯意識」, 「近代市民型意識」, 「消極的愛着意識」, 「個人中心型意識」, 「無関心型」などへの類型化) が可能かどうかのいわば概念規定に係る原理的な問題としてもとらえることができる。<sup>(12)</sup>

## II

都市社会学における社会意識研究の流れに即してみれば、愛着意識はあくまで一貫して、地域共同的属性を示すものとして理解され、認識されてきたといえる。松原治郎氏によれば「自治意識の全体構造のうち、地域へのより自然的、伝統的意識の部分を『郷土意識』と呼んでおく。自然や社会への没我的愛着—具体的には土地への愛着意識、定住意識、地元主義—として表現される」<sup>(13)</sup>ものと規定されている。なお、これらの具体的な内容を表現するものとして、(1) local behavior—とくに、伝統的地域行事への参加態度、(2) 共同体的な「村仕事」への参加態度、(3) 伝統的地域集団への参加態度、(4) 地域への愛着度、(5) 地域への定着度、(6) 地域的な生活空間構造等として、ここでは愛着意識はあくまで自治意識の地域への自然的、伝統的な部分を表現するものとして位置づけられていることがわかる。愛着意識のこうした性格的位置づけは、地域社会的属性がローカリティの名のもとに整理されていることからあきらかにされよう。これについてみると、1. ローカルな行動に対する指標 (イ. 行動空間、ロ. 地域的行事や催し物への参加、ハ. 集団参加および近隣づきあい、ニ. マスメディア接触) 2. 地域意識の認知的側面に関する指標 (イ. 県民気質の意識、県内各地域の地方的性格に関する意識の有無、ロ. 地域特性の自覚、ハ. 東京との関係ないし首都圏に対する態度、ニ. 伝統的な価値意識) 3. 地域への関心についての指標 (イ. 関心の範囲、ロ. 関心の分解) 4. 態度の情緒的側面に関する指標 (イ. 地域社会への愛着、ロ. 永住意志、ハ. 郷土への愛着)<sup>(14)</sup>として表現されている。また愛着意識を包括的な住民意識としてみた場合、住民意識の生活構造論的展開をみることができる。とくに住民意識調査の過程では、i 生活空間に対する意識 ii 生活環境施設、自然環境体系に対する意識 iii 居住地への人間関係および地域的集団、活動への参加と行動に対する意識 iv 居住地への心理的帰属感・一体感、定住意志等の項目としてあげられている。ここで愛着意識 (= 住民意識)<sup>(15)</sup>はivの居住地域への心理的帰属感・一体感、定住意志の項目として掲げられていることは敢えて指摘するまでもない。

さて、愛着意識の基本的な性格とその位置づけをとくにローカリティ及び住民意識の生活構造論的展開を中心に概観してきた。再度指摘するまでもなく、愛着意識の特徴的性格としては、地域社会への情緒的、心理的一体感を表わすものとして、とくに地域共同体的属性をもつものとして位置づけられていることがわかる。さて、こうして位置づけられてきた愛着意識の地域共同体的属性としての基本的な性格を、モデルとしての〈コミュニティ〉との係りにおいて検討した場合、この意味での愛着意識は如何なる性格的位置づけがなされるであろうか。

前節ですでにふれたように、〈コミュニティ〉と〈地域共同体〉とは地域性に係わる同次元尺度の両極に位置づけられるものとするならば、特定地域社会への愛着意識の表明は、そのまま「コミュニティ」形成にとっては期待されない意識として、否定的評価につながるものといえる。また、同時にこうした居住地域への愛着意識の強さは、「コミュニティ」形成にとって地域共同体的属性度を測るバロメーター的性格をもつことにもなる。それゆえに、こうした愛着意識の位置づけは究極的に、周知のいわゆる居住地域社会への心理的帰属感（愛着、定住意志）の動機づけをそれぞれ〈地域共同体〉の系と〈コミュニティ〉の系に区別するという新たな方向性を示唆することになる。さらには、またこうした区別は、すでに明らかなようにやがて行政レベルでの住民意識調査にみられる愛着意識の「伝統型連帯意識」、「近代市民型意識」、「消極的愛着型意識」、「個人中心型意識」、「無関心型」といった類型化をみることにもなる。とくに前者の両方向への区別に関して、奥田氏はまず愛着意識、定住性向の動機づけを「情緒的対応」、「感情的対応」、「認知的対応」、「個別的一用具的一対応」に分類したあとで、しかし、こうして得られた具体的内容によって居住地域への愛着・誇り・定住意志といった心理的帰属感が表明されたとしても、これがただちに〈地域共同体〉的属性を表わすものとはいえないと指摘していることである。そこで、例えばこうした理由のうち、とくに「先祖代々住んでいる」等<sup>(16)</sup>に代表される〈地域共同体〉の系と「自分が気に入って住んだから」等に表わされる〈コミュニティ〉の系との区別は可能であろうとの見解が示される。なお、こうした区別は決定的なものではないと前置きしながら、「住民の地域社会へのトータルな価値志向には居住年数の因子が有意に相関」するのであり、「在住年数という変数もながさがよりも……ふかさが問われる。……この『論理的転換』の解明がえられれば居住年数のながさが、ただちに、地域共同体的属性として、伝統型住民意識の醸成にむすびつき、また、居住地域社会への普遍的なパースペクティブを欠くとの見解に対する一定の批判が可能であろう」と。ここで注目されるべきことは、こうした具体的内容によって、これを同次元の両極に位置するものとして区別することの論理的な妥当性についてである。こうした区別は、一見して如何にも当然のごとく両極に位置づけられるかのようにみえる。しかし、この動機づけを個別的に検討した場合、この両者を明確に区別しうる尺度をみいだすことはやはりきわめて困難なことである。こうしてみると、上記のそれぞれの動機づけは同一線上に同時に混在するものであり、同質的な意味をもつ単なる表現上の問題としてとらえることも不可能なことではないように思われる。さて、ではこうした動機づけによって区別した場合、いわゆる〈地域共同体〉の系と〈コミュニティ〉の系とは論理的に如何なる関係に立つものとして認識されるであろうか。すでに明らかなように、モデルとしての〈コミュニティ〉が〈ローカルティ〉、〈地域共同体的属性〉の喪失ないし解体したところに、また〈コミュニティ意識〉が普遍的な価値意識に支えられた権利・業務関係としてとらえられるならば、この場合の〈コミュニティ〉の系に属する愛着理由は必然的に普遍的な価値意識を内含するものとしての解釈がなされる。この場合、普遍的な価値意識をも

つものとして表明されたこうした意識が果して愛着意識として見做すことが可能かどうかである。ゆえに、感覚的、心理的次元でとらえられる愛着意識は、住民の主体性、自主性ないし権利・義務関係などに裏打ちされた、いわば一般的な価値感と直接むすびついた、社会意識としてとらえることには無理がある。従って、愛着意識は、「住民生活意識」、「市民意識」、「コミュニティ意識」へと直線的に向うものというよりも、原則的に当該地域社会への生活や生活環境に係ってもつところの情緒的・感覚的反応としての、限定的な性格をもつものといえる。愛着意識をこのように規定するかぎりにおいて、例えば前述した愛着意識の「伝統型連帯意識」、「近代市民型意識」、「消極的愛着型意識」、「個人中心型意識」、「無関心型」とする分類は、少なくとも「コミュニティ意識」レベルでとらえられており、また基本的に「住民生活意識」と「市民意識」さらには「コミュニティ意識」との概念上の混乱がみられるといえよう。

では、つぎに愛着意識と地域社会との原理的な係りは、如何なる関係として捉えられるであろうか。愛着意識が人々の本質的な感情、心理に係わるものとして、他の個人ないし集団（＝地域社会）の価値基準・役割期待・役割などを、自己の意識や行動のうちに内面化させ、同化させる心理的過程としても捉えられるならば、地域社会へ係ることによって培われるこうした心理的過程は、いわゆる住み馴れとしてのある種の情緒的共感を惹起せしめることは当然のことである。この場合、問題とされるのはこうした心理的過程によって形成されるある種の態度が〈コミュニティ〉にとって地域共同体的属性としてただちに伝統型住民意識の醸成に結びつくかどうかの問題でもある。やや理念的なとらえ方をすれば、住民意識の抱えもつ近代化志向は愛着意識の伝統型住民意識への志向性を阻止する機能を果すとともに、またこうした愛着意識は逆に住民意識の近代化への志向性を活性化させる役割を担うものといえる。それはいわば相互に規定し合う関係としてとらえることができる。但し、この場合の愛着意識の地域への一体感・帰属感はあくまで「個々の生活を守り、向上させてゆくことを第一義としながら意図的に地域の生活環境を持続的に形作って」<sup>18)</sup>ゆこうとする、容認される範囲での愛着意識であることはいうまでもない。

### III

これまでにみた愛着意識の理論的な検討は、すでに明らかなように住民意識調査を中心にすすめられてきたといえる。ここでは、とくにこうした住民意識調査にみられる具体的な設問の事例を通じて、調査担当者が如何なる枠組のもとに愛着意識を捉えようとしているかを検討するとともに、あわせてこれらの検討を通じてすでにみられる愛着意識の概念をめぐる諸問題について整理をすることにする。

さて、具体的にみた場合、住民意識調査にみられる愛着理由を問う設問としては単に当該居住地域への愛着の有無を問う形式が一般的であるが、ここではそれらを含めて基本的と思われ

る幾つかのパターンを掲げることにする。

〔事例 1〕

Q あなたは今住んでいる八王子市に、愛着のようなものをお感じになりますか。

1. 感じる→SQ1 それはどう言う点ですか。 (具体的に)

( )

2. 感じない→SQ2 それはどうしてですか。 (具体的に)

( )

3. どちらとも云えない。

Q あなたは東京全体に、何か誇りとか、愛着のようなものをお感じになりますか。

1. 感じる 2. 感じない 3. どちらとも言えない

Q あなたは、八王子市民として感じる方が強いですか、それとも東京都民として感じる方が強いですか。

〔八王子市民の生活と意識調査 1970〕<sup>(19)</sup>

この調査では、すでに明らかなように調査担当者が愛着意識の具体的な理由・動機づけを予め回答選択肢として用意するのではなく、あくまで回答者に自由に記入させていることに特徴がある。また続く設問ではこうしたローカル・アспектへの帰属とは別にメトロポリタン・アспектへの帰属をとっていることが特徴的である。周知のように、ここでは分析の段階でコミュニティ・モデルとの対応が試みられている。参考まで掲げれば、「地域共同体」モデルと「ローカル型」、「伝統的アノミー型」モデルと「アパシー型」「個我モデル」と「メトロポリス型」、「コミュニティ」モデルと「コミュニーナル型」のそれぞれとの対応が析出されている。なおすでにふれたように、〈地域共同体〉の系と〈コミュニティ〉の系との動機づけの区別は上記の設問による本調査を中心とする分析結果にもとづいてなされたことはいうまでもない。

つぎに、こうした自由回答形式とは違って、すでに愛着理由・動機づけがある一定の基準の下に分類され、回答選択肢が予め用意されているケースをみることにする。

〔事例 2〕

Q あなたは、札幌のまちに「自分のまち」としての愛着を感じていますか。

1. 感じている

2. 感じていない

3. わからない

SQ (「感じている」ものに) 愛着を感じている理由は、どこにあると思いますか。この中〔回答票〕から1つか2つお選びください。

1. 上下水道、道路などの都市基盤が充実しているから

2. 教育や文化水準が高いから
3. 緑が多く自然が豊かだから
4. 災害が少なく、治安がよいから
5. 市民が親切で人情味に富んでいるから
6. まちの全体の景観がすぐれているから
7. 気候が好きだから
8. 生まれたところ、育ったところだから
9. その他
10. わからない

〔札幌市政世論調査 1979〕

この札幌市政世論調査の愛着理由は、生活環境体系を便宜的にそれぞれ自然系、施設系、社会系に分類した場合、自然系を3. 6. 7, 施設系を1, 社会系を2. 4, として区別することが可能であろう。但し、この分類はあくまでも決定的なものとはいえない。また奥田氏による分類に従えば、「情緒的対応」としての8, 「感覚的対応」としての3. 5. 7, 「認知的対応」としての2. 6, 「個別利害の一用具類一対応」としての1, にそれぞれ分類することができよう。

なお本調査では、続く設問で定住理由を尋ねているが参考まで掲げれば、環境上の理由として「街がきれいだから」(24.6%), 「気候が好きだから」(30.0%), 「人情が厚く親切だから」(6.8%), 「親戚や知人が多いから」(23.8%), 「住みなれているから」(64.8%)をあげ、また生活上の理由として「生活が便利だから」(62.6%), 「いろいろな仕事があり、就職の機会が多いから」(19.4%), 「子供の教育に便利だから」(24.9%), 「教育・文化などの公共施設が多いから」(25.1%), 「食料品や消費物質が豊富だから」(13.0%)を主な理由としてあげている。すくなくとも愛着意識に関しては、基本的に地域社会の生活環境施設を視点に、とくに定住希望の場合もすでに明らかなようにまったく同一の理由をかかげており、愛着意識と定住理由の具体的な差異はみられない。同様の形式をとるものとして、東京都民生局による『地域社会に関する世論調査(1979)』<sup>(21)</sup>では、愛着理由をそれぞれ「長年住みなれている(46.6%)」、「生活上便利なところだから(18.1%)」、「自分の土地、自分の家だから(18.1%)」の三理由をあげている。この場合、愛着意識は基本的に生活の便利さといわゆる住み馴れとに区別し限定的に用いられていることがとくに注目される点である。

〔事例 3〕

Q あなたはいま住んでいる町が好きですか。

1. 好き
2. まあ好き
3. あまり好きではない
4. きらい
5. どちらともいえない



(「好き、まあ好き」)それはどんな理由ですか。(「あまり好きでない、きらい」)それはどんな理由ですか。

(1つえらんで○をつける)

(1つえらんで○をつける)

- |                        |                           |
|------------------------|---------------------------|
| 1) 空気がよく、生活環境に恵まれているから | 1) 公害など、生活環境が悪いから         |
| 2) 生活が便利               | 2) 生活が不便                  |
| 3) 自由でのんびりしている         | 3) さわがしく落ちつかない            |
| 4) 活気がありどんどん町が発展していくから | 4) まわりの人々の口がうるさい          |
| 5) 人の気持があたたかい          | 5) 人の気持がつめたい              |
| 6) よい学校や就職口があるから       | 6) よい学校や就職口がない            |
| 7) 親の家業もあり、長男だから       | 7) 活気がない                  |
| 8) 友人、仲間がたくさんいるから      | 8) 自分を知っている人が多すぎる         |
| 9) 先祖代々の土地だから          | 9) 古くさい因習があり、文化的におくれているから |
| 10) 通勤に便利だから           | 10) 通勤に不便だから              |
| 11) その他 ( )            | 11) その他 ( )               |

(千葉県「袖ヶ浦町の青少年の生活と意見調査」1975)

(22)

本調査では、直接に愛着というタームは使用していないが実質的に愛着意識と互換的タームであることは敢えて説明するまでもない。ここでとくに、これまでにあげた調査に比較して特徴的なことは当該地域社会での心理的、情緒的反応の次元にかかわる人間関係を中心とした愛着理由及び動機づけが用意されていることである。なお、この設問はさらに以下にみる 22 項目にわたる定住環境に関する具体的設問と連係していることが特徴的である。なお、ここでとくに注目されるのは設問方法に関して最初に愛着意識の具体的内容を尋ね、つぎに愛着意識の強弱を三段階尺度で評価するという方法が検討されていることであろう。いわゆる愛着理由の具体的内容を問うと同時に、質的な領域まで分析可能な設問として用意されていることである。では以下に、定住環境に関する 22 項目の具体的な設問をあげる。

Q つぎのことについて、あなたのお考えや感じていることに近いものを三つの中から選んで○をつけてください。

		□.どちらとも いえない	
1. 袖ヶ浦町は将来発展すると思いますか	イ. 発展する	□.	ハ. 発展しない
2. 町を愛する心がありますか	イ. ある	□.	ハ. ない
3. 町の伝統的行事や祭を存続させたいと思いますか	イ. 存続させたい	□.	ハ. 廃止した方がよい
4. 地付の人々や新しく入って来た人たちとの間はうまくいっていると思いますか	イ. うまくいっていると思う	□.	ハ. 問題がある

5. 町の人々の気質や性格の面については	イ. よい	ロ.	ハ. わるい
6. 日常の買物の便については	イ. 便利である	ロ.	ハ. 不便である
7. 自然環境に接するという点では	イ. 住みよい	ロ.	ハ. 住みにくい
8. 交通事故 災害・ばい煙などの公害は	イ. ほとんどない	ロ.	ハ. 問題がある
9. ハエ・蚊・ゴミ処理については	イ. 十分である	ロ.	ハ. 不十分である
10. 交通機関の便利さという点では	イ. 便利である	ロ.	ハ. 不便である
11. 商店街やスーパーなどの店の種類や品数では	イ. 十分である	ロ.	ハ. 不十分である
12. 夜道や町の暴力などの防犯・防火の点では	イ. 住みよい	ロ.	ハ. 住みにくい
13. 映画・パチンコ・ボーリング場などの娯楽施設の面では	イ. 住みよい	ロ.	ハ. 住みにくい
14. 体育館・スポーツ競技場・図書館などの社会教育施設の面では	イ. 十分である	ロ.	ハ. 不備である
15. 地域の青少年の会や団体などのまとまりという点では	イ. よいと思う	ロ.	ハ. まとまりがない
16. 社会教育に関する学習上の問題や技術の修得方法については	イ. 行きとどいて いる	ロ.	ハ. 問題がある
17. この地域での男女交際の規制は	イ. 規制はない	ロ.	ハ. 規制が強い
18. 結婚する場合に相手の居住地域や家柄などについて自分だけで決められますか	イ. 自由である	ロ.	ハ. 問題になる
19. 袖ヶ浦町が合併して出来たことは	イ. よかった	ロ.	ハ. 問題がある
20. 町のこれまでの企業誘地は町の生活にとってよかったと思いますか	イ. よかった	ロ.	ハ. 問題がある
21. この町での家業や自分の職業の将来性はあると思いますか	イ. 将来性はある	ロ.	ハ. 将来性はない
22. この町での職業の種類や就職の機会は十分ですか	イ. 十分である	ロ.	ハ. 不十分である

## 〔事例 4〕

Q あなたはいま住んでいる地域に対して愛着心をおもちでしょうか。次の中からあなたのお考えに一番近いものをお選び下さい。

1. ここは昔からの故郷であり、土地の人々も信頼出来るので愛着はきわめて強い。
2. 自分の住んでいるところは、義理や人情ではなく、地域の人達が互いに協力的で、自由であり、住みよいところなので、愛着を感じている。
3. 地域へのつきあいもほどほどだし、これといった理由はないが愛着はある。
4. 個人の生活さえ楽しくやればいいので、地元への愛着など全然持っていない。
5. 地域とのつきあいは、適当にやっているが地域に対する愛着心は別れない。

〔第二次千葉市コミュニティ計画調査1981〕

本調査の最も特徴的なことは、上からそれぞれを「1. 伝統的連帯意識」、「2. 近代市民型意識」、「3. 消極的愛着型」、「4. 個人中心型意識」、「5. 無関心型」に類別していることである。参考まで、同調査で得られた結果についてみると、地域別特徴では「伝統的連帯意識」は農村地域に多く、「消極的愛着型意識」は主に団地地域に最も多くみられるとしている。また職業別では事務・技術従事者、専門的管理的職業従事者では「消極的愛着型」を示し、労務的職業従事者及び自営業者では「近代市民型」を示し、とくに就業地を東京にもつものが「消極的愛着型」ないし「無関心型」に集中していると指摘している。

こうした分析結果からも明らかなように、これまでみた事例と基本的に異なる点は愛着意識をコミュニティ意識のレベルでとらえていることであり、あくまで愛着意識は普遍的な価値意識に支えられた、そしてまた発展の方向性をもつものとして把握されていることである。従って、愛着意識と「住民生活意識」、「市民意識」との概念的な区別はみられない。こうした愛着意識の類型化は、敢えて指摘するまでもなくつぎの「八王子市調査」の住民意識モデルに倣ったものと思われるので、参考までに掲げることとする。<sup>(23)</sup>

Q 一般に、地域生活について、つぎの四つの意見があります。率直にいて、あなたのお考えに近いものを選んで下さい。

1. この土地にはこの土地なりの生活やしきたりがある以上、できるだけこれにしたがって、人々との和を大切にしたい。

(→「地域共同体」モデル)

2. この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。地元の人熱心な人たちが、地域をよくしてくれるだろう。

(→「伝統型アノミー」モデル)

3. この土地に生活することになった以上、自分の生活上の不満や要求をできるだけ市政その他に反映していくのは、市民としての権利である。

(→「個我」モデル)

4. 地域社会は自分の生活上のよりどころであるから、住民がお互いにすすんで協力し、住みやすくするよう心がける。

(→「コミュニティ」モデル)

また本調査(事例4)の具体的な設問形式に注目してみれば、当該地域社会への愛着意識の有無ないし強弱に関する尺度化が上から順にそれぞれ「きわめて強い」、「感じている」、「ある」、「全然もってない」、「別にない」、のようにきわめて抽象的表現がされている。このことは本調査の設問が居住地域への愛着意識の有無や強弱ないし具体的愛着理由そのものを問うよりも、地域社会に対する態度ないし価値観を問うという、いわばあきらかにコミュニティ意識としてとらえようとしていることを示唆するものといえる。

以上、住民意識調査にみられる典型的ないくつかの愛着意識の具体的な設問の検討を通じて、

調査担当者が如何なる枠組のもとに愛着意識を把握しようとしているかについて考察してきた。

これらの検討を通じて、すでに明らかなように、当該地域社会への愛着意識の具体的内容を問う形式とその分析の意図にはおよそつぎの三つのパターンがみられることである。

第Ⅰ型としては、八王子市調査に代表されるもので、愛着意識の具体的内容を予め回答選択肢として用意ないし明示せずに入力させる、いわゆる自由回答法をとるものである。こうした形式では一般にローカル・アспектへの愛着とは別に、メトロポリタン・アспектへの帰属パターンをとっていることが特徴的でもあった。この場合の具体的な内容についてみれば、すでに指摘したように、あくまでコミュニティ意識レベルで愛着意識をとらえており、愛着意識は普遍的な価値意識をもつものとして理解されていることである。(事例1)

第Ⅱ型としては、内容的にみれば第Ⅰ型のパターンと原則的に同一のものといえるが、いわゆるコミュニティ・モデルとしての四つの住民類型をそのまま愛着意識に置きかえていると思われるタイプである。それゆえに、このパターンでも愛着意識は普遍的な価値観をもつものとして把握されている。Ⅰ型とのきわだった相違は基本的に回答形式にみられるだけであり、この意味でⅡ型はⅠ型を変型した広用型であるといえる。(事例2)

第Ⅲ型としては、愛着意識の具体的内容の視点をとくに生活環境施設にもとめ、あくまで愛着意識を居住地域社会への心理的、情緒的反応の一環としてとらえているところに、きわだった特徴がみられる。(事例3.4)

以上、再度指摘するまでもなくこの三者を厳密に内容的に吟味した場合、第Ⅰ型と第Ⅱ型は第Ⅲ型に対して同一の内容をもつものといえる。従って愛着意識の基本的なパターンとしては最終的にⅠ型、Ⅱ型対Ⅲ型としてとらえることができる。以上の設問の検討過程からすでに明らかなように、こうした愛着意識の概念規定をめぐる二つの原理的な相違は、次の点として要約することができる。いわゆる住民意識の下位体系として位置づけられる愛着意識が、包括的な住民意識(＝コミュニティ意識)と同次元において、あくまで普遍的な一般的価値観と結びついた社会意識として、発展的方向をとるものとして規定されるか、もしくは、あくまで情緒的反応としての地域社会への素朴な愛情の一環として規定されるかである。なお重要なのは後者の場合、あえて付言すれば将来においてこうした素朴な地域感情としての愛着意識が、これとはまったく性質の異なるコミュニティ意識へと質的に変化することまでも否定するものではない。筆者はすでにふれたように、本学研究紀要(第16号)で、愛着意識の本質的な性格として以下にみるような規定をしたことがある。「それは居住地域への帰属感・一体感・定住意志といった心理的・情緒的反応である。これを醸成し、より強める変数としてはシンボルを媒介にした『能動的な人間関係』によって生じる『共通体験の所産・足跡』である。従って地域へのアイデンティティの対象は、日常の人間関係(＝社会生活)を通じて意味づけられた施設であり、ある集団がもつ雰囲気や息づき、臭い」<sup>24)</sup>である。そのかぎりにおいて「包括的な住民意識には<コミュニティ>型や<地域共同体>型などに類型化されるが、いずれの型にも対応す

るところの愛着意識が想定され<sup>(25)</sup>うると。従って愛着意識はこのようにみえてくると、質的にも〈コミュニティ意識〉と同一のものとして位置づけることには無理がある。愛着意識はあくまで特定地域社会に居住することによって培かれる情緒的反応としての地域への素朴な感情として規定されるものといえる。

## 注

- (1) 奥田道大「社会的性格と市民意識」(倉沢進編『都市社会学』, <社会学講座 5> 1973) pp. 199—204
- (2) 同上, p. 204
- (3) 同上, p. 205
- (4) 同上, p. 211
- (5) 同上, p. 209
- (6) 倉沢進「近郊都市と市民意識」(『日本の都市社会』福村出版, 1968) p. 263
- (7) 同上, pp. 263—264
- (8) 中村八朗「近郊における地域集団」(『都市コミュニティの社会学』, 有斐閣, 1973) p. 138
- (9) 鈴木広「コミュニティ論の今日的状況」(鈴木広編『コミュニティモラルと社会移動の研究』アカデミア出版会, 1978)
- (10) 高橋和宏「大都市における社会生活上の居住性(そのI)」(『総合都市研究』第9号, 東京都立大学都市センター, 1980) p. 52
- (11) 奥田, 前掲書, 1973, p. 212
- (12) 千葉市コミュニティづくり懇談会「地域住民の生活とコミュニティ意識の形成」(『第二次千葉市コミュニティ計画調査報告書』1981) p. 70
- (13) 松原治郎「郷土意識—伝統的共同体意識—」(『大都市周辺における自治意識の実体調査報告書』社団法人と論科学協会, 昭44年) p. 18
- (14) 日本放送出版『放送文化』第21巻・第2号, 1966, p. 13 および奥田, 前掲書, 1973, pp. 204—205
- (15) 奥田, 前掲書, 1973, p. 210
- (16) 奥田道大「住民意識と行政需要」(磯村英一他編『都市形成の論理と住民』東京大学出版会, 1971) pp. 168—170
- (17) 同上, pp. 212—213
- (18) 松原治郎「地方自治の変容と住民運動」(『住民参加と自治の革新』学陽書房, 1974) pp. 24—25
- (19) 磯村英一・鶴飼信成・川野重任編『都市形成の論理と住民』東京大学出版会, 1971, p. 411
- (20) 内閣総理大臣官房広報室編『世論調査年鑑—全国世論調査の現況—昭和55年度版』, (調査206) p. 370
- (21) 同上, (調査99), p. 262
- (22) 千葉県袖ヶ浦町教育委員会『袖ヶ浦町の青少年の生活と意見調査』1975, 本調査は袖ヶ浦町教育委員会の委託により, 淑徳大学社会学研究室の森宗平教授によって実施された。なお本調査の報告書は未刊である。
- (23) 磯村英一他編, 前掲書, 1971, p. 141
- (24) 拙稿「コミュニティ・センチメントに関する一考察」(淑徳大学研究紀要, 1982, 第16号) pp. 48—49
- (25) 同上, p. 24

## Attachment to One's Community

by Junro TAKAHASHI

“Local attachment” is an essential concept in community researches.

This term however, has been used without its clear definition, causing confusion in various fields. The term's lack of clarity can be seen the way it is used in academic fields such as urban sociology and community sociology, as well as in practical, administrative fields in which community identification researches are performed.

I have already considered in Shukutoku College Bulletin No. 16, 1982, what concepts are connected with “local attachment” and what the necessary conditions to construct those concepts are.

On the basis of these analyses, this report will examine in what ways the term “local attachment” has been defined, particularly in community identification researches, and give reconsideration to the term's conceptual frame.